昭和62年(1987年)6月10日　教皇様の声　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)

6　JUNE, 1987　毎月10日発行　第86号

教皇様の声

聖霊降臨

使徒たちの宣教の始め

1 聖霊降臨祭の典礼は、私たちをエルサレムのあの高間へといざないます。周知のように、そこの扉は最初しっかりと閉じてありました。安息日の翌日、使徒たちは扉を閉めきって、最後の晩さんの聖なる思い出多い高間に集まっていた。「空の墓」の知らせは、すでに朝から広がっていましたが、皆はなお怖れおののいていたのです。

一同が「戸を閉めて」集まっているとき、復活したキリストがおいでになりました。入って来て皆のまん中に立ち、挨拶なさったのです、「あなたたちに平和」と。「その手と脇を見せられた」(ヨハネ20・19)と福音記者は記しています。十字架上での傷あとをお見せになったのです。

最初に感じた怖れは吹き飛んで、師を前にした使徒たちは喜びに満たされました。キリストは再び口を開き、おおせになりました。「あなたたちに平和。父が私を送られたように、私もあなたたちを送る。」(ヨハネ20・21)　それは復活なさった主の、弟子たちへの最初の言葉でした。

福音史家ヨハネによると、「そう言ったのち」…「彼らに息を吹きかけられました。ちょっとした描写ですが、まことに場面が目に浮かぶようです。キリストは使徒たちに息を吹きかけ、仰せになったのです、「聖霊を受けよ」と。(同20・22)

2 そういうわけで、聖霊降臨というでき事は、ご復活の日から始まったと言えるのです。昔から教会が御父と御子の「救いの息吹き」と呼びならわしてきた御方、すなわち聖霊が、復活のあと使徒たちに与えられました。キリストが十字架上から直接に、高間へと聖霊をお連れしたとも言えるでしょう。キリストは「死去と復活の力」によって使徒たちに〈息を吹きかけ〉られたのです。そして、その贖いの力のあらわれが、十字架にかけられたときの手と足と脇腹の傷あとなのです。

すべてこれらのことは、五十日前、高間の「閉じた扉の内側」で起こったことです。今夜祝う典礼は、聖霊をお送りになる復活されたキリストに焦点をあてています。復活祭から五十日後の聖霊降臨(五旬節)の朝に起こった出来事を本当に理解したければ、これ以外に方法はありません。

使徒行録がそう語っています。教会はエルサレムのあの高間で生まれたのです。真理の霊の息吹きが使徒たちの魂に浸透し、使徒たちが「いろいろな国のことばで話し始めた」(使徒行録2・4)その時、教会は誕生したのです。しかし何よりも、使徒たちの内なる力が新たにされました。その力のおかげで、十字架にかけられ、そして復活したキリストの証人となることができるためでした。

こうして高間の扉はあけ放たれ、使徒たちはエルサレムの街路へと出て行きます。キリストの命令を受けて世界のあらゆる所へ旅立ったのです。「聖霊が……力をお与えになる。あなた方はエルサレム、(…)地の果てまで私の証人となるだろう。」(1・8)

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1987
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

3 教会は、聖霊すなわち慰め主から、キリスト自身の使命をもとに発展する、使徒の派遣というかたちで生まれたのです。

復活後の主の最初の言葉は、「父が私を送られたように、私もあなたたちを送る」(ヨハネ20・21)でした。教会自体がこの派遣の手段です。教会は常に変わらず、宣教を続けてやみません。その究極の源は御父であり、死して復活したキリストに根ざし、キリストが使徒に伝えた(聖霊を受けよ)聖霊の御力と繋がっています。

聖霊の息吹きは私たちと共に

4 第二バティカン公会議が強調して教えることがあります。それは、神の民・教会が、大祭司・預言者、王であるキリスト御自身の救いの使命に与っているという点です。

教会が救いのわざに与るのは、洗礼を手始めに、教会生命の中で神の御言葉と一つに結ばれた全ての秘跡を通して続けられます。中心になるのは聖体の秘跡です。聖体はキリストの死去と復活のきわ立った記念であり、教会が日々一層完全なものとして生まれ変わり、キリストの体となるための秘跡でもあるからです。

こうして私たちは、キリストが使徒たちに「息を吹きかけ」たあの高間に絶えず戻って行くのです。キリストは聖霊を送ると同時に、使徒たちを新しい神の民、つまり新しいイスラエルの初穂となさいました。そして神の御子の救いと贖いの使命は、この新しい民の内で続けられるのです。

「聖霊によらなければだれも『イエズスは主である』と言うことはできぬ。」(コリント①12・3)　聖霊の助けがなければ、キリストへの信仰を告白することも、教会と社会においてキリストの使命に加わることもできません。

5 聖霊降臨の前夜を祈り明かすため聖ペトロ広場に集まった私たちには、キリスト信者にとって根本的なこの真理が、特別な重要性を帯びてきます。

私たちは、聖体にあずかり、キリストの証人となり、キリストに感謝を捧げるため、集まりました。キリストのおかげで聖霊降臨の「息吹き」が私たちのうちに生きている、すなわち、真理の霊、仲介者聖霊の息吹きのおかげで、教会は弟子たちの心の中でつねに新たによみがえることができるからです。

この救いの「息吹き」と共に、使徒たちに向けられた次の言葉にたえず耳を傾けねばなりません。「父が私を送られたように、私もあなたたちを送る。」　こうして皆さんは、ここ、使徒ペトロの後継者・ローマ司教のもとにお集まりになりました。皆さんには、教皇と共に引き受けていただきたいことがあります。それは、ある意味で複雑かつ種々さまざまな使徒職、すなわち、司教や司祭、助祭がたずさわる使徒職のみならず、信徒のなすべき使徒職のことです。信徒の皆さんは、教会の歴史の中で常にこのような使命に召されてきましたし、今もそうです。現代社会がますます新しい問題や課題を抱えるようになっている今日、信徒の使命はいよいよ重大なものとなっています。

キリスト シリーズ③

聖霊によって 処女マリアより 生まれたイエズス

1 前回は、「救い主」を意味する「イエズス」の御名について考えました。ガリラヤの町ナザレトで三十年間をお過ごしになったイエズスは、「聖霊の御力によってお宿りになり、処女マリアよりお生まれになった」御方、神の永遠の御子です。信仰宣言、使徒信経、ニケア・コンスタンチノープル信経でこの信仰を宣言します。これは教会の教父たちと公会議が教えてきたことです。これによると、神の永遠の御子イエズス・キリストは、「御母の実体よりお生まれになった」(アタナシウス信経、DS76)ということになります。そこで教会は、イエズス・キリストが、アダムの娘であり、アブラハムとダビドの子孫にあたる処女マリアのうちに懐胎されお生まれになったことを公言します。

ルカの福音によれば、マリアは「男を知らずに」(ルカ1・34、マテオ1・18、24、25)聖霊の御力によって神の御子を宿されました。つまりマリアは、イエズスの御誕生以前も、出産のときも、御誕生の後も、処女のままでおられたということです。これは新約聖書が記す真理です。五五三年コンスタンチノープルの公会議では、「永遠の処女マリア」という表現を使っています。また六四九年のラテラノ教会会議においても、「終生処女である神の母マリアが、全ての世紀の前に父なる神から生まれた神のみことばを、終りの時に、種なしに、聖霊によって受胎し、処女性を傷つけずに生み、出産後も処女性を保ったことを」教えています。(D503)

マリアの同意

2 使徒たちの教えにもこの信仰が伝えられています。例えば、聖パウロのガラツィア人への手紙にはこう記されています。「神は、時満ちて御子を女から生まれさせ……遣わされた……私たちを養子にするためであった。」(ガラツィア4・4〜5)　一般に「幼年期の福音書」と呼ばれているルカとマテオの福音の最初の章には、イエズスの託身と誕生に関する出来事が詳しく記されていますが、ここでその場面に注目してみましょう。

3 なかでも特にルカが記す次の場面はとてもよく知られています。聖体祭儀で読まれ、御告げの祈りにも取り入れられているからでしょう。その一節はマリアへの御告げの場面です。ちょうど洗者聖ヨハネが生まれるという知らせの六ヶ月後でした。

「……天使ガブリエルは、ガリラヤのナザレトという町の、ダビド家のヨセフといいなずけであるマリアという乙女のもとに、神から遣わされた。」(ルカ1・26)　天使は語ります。「あなたに挨拶します、マリア。」これが教会の祈り「天使祝詞」です。マリアは天使の挨拶に当惑します。

「マリアはこれを聞いて心乱れ、何の挨拶だろうと考えていると、天使は『恐れるな、マリア。あなたは神の御前に恩寵を得た。あなたはみごもって子を生む、その子をイエズスと名づけなさい。それは偉大な方で、いと高きものの子と言われます。』……マリアは『私は男を知りませんがどうしてそうなるのですか』と聞いた。天使は答えた。『聖霊があなたに降り、いと高きものの力の影があなたを覆うのです。ですから、生まれる子は聖なる御方で、神の子と言われます。』」(ルカ1・29〜35)　こう告げてのち天使は、マリアの親戚で石女といわれていたエリザベトが老人ながらみごもったことを印として与え、こう言います。「神にはできないことはありません。」　するとマリアは「私は主のはしためです。あなたの御言葉のとおりになりますように」(ルカ1・37〜38)と答えました。

4 聖霊の働きによってキリストを生んだのは母であると同時に処女であるマリアでしたが、教会のこの教えの根拠になるのがルカ福音書なのです。マリアが「なれかし」、「あなたの御言葉のとおりになりますように」(ルカ1・38)と言われたとき、聖霊による驚くべき御宿りが成就しました。これは神の御子の託身の秘義が成就した最初の瞬間でした。

5 イエズスがお生まれになる以前の状況について、ルカ以上に詳しく記しているのがマテオです。「イエズス・キリストの誕生は次のようであった。母のマリアはヨセフのいいなずけであったが、同居するより以前に、聖霊によってみごもっているのがわかった。夫のヨセフは正しい人だったので、彼女を公式に辱めようとせず、ひそかに離別しようと決心した。彼がこうしたことを思い煩っていたとき、突然夢の中に主の天使が現われて言った、『ダビドの子ヨセフよ、ためらわずにマリアを妻として迎えよ。マリアは聖霊によってみごもっている。彼女は子を生むからその子をイエズスと名づけよ。なぜなら彼は罪から民を救う方だからである。』」(マテオ1・18〜21)

説教・講話・書簡等の抄訳

イエズスの聖心

生命の源

6 幼年期に関するこの二つの福音書は、イエズスが、聖霊によって人となり、処女マリアからお生まれになったという最も重要で基本的な点で一致しています。また、二つの福音書は互いに補い合っています。すなわち、この驚くべき出来事が起こった状況を明らかにするのに、ルカはマリアの側から、マテオはヨセフの側から記しているのです。

この福音書の話の源がどこからのものかを明らかにするのに、ルカの次の記述に注目しましょう。「マリアは注意深くそのことを心にとどめて考え続けた。」(ルカ2・19) ルカはこれを二ヶ所に記しています。最初はベトレヘムから羊飼いたちが帰ったあと、二度目は神殿にイエズスを見出したあとです。(ルカ2・51参照) 福音史家ルカ自身が「幼年期の福音書」を書くにあたって使った情報源がイエズスの御母であったと教えてくれるのです。新約聖書が書かれ、初期キリスト教の聖伝が起こりつつあった使徒の時代に、「そのことを心にとどめられた」(ルカ2・19参照) マリアは、キリストの死と復活ののち、自らに関すること、神の母としての役割に関することについて証人になることができたのです。

7 マリアは処女でありながら懐胎した、と福音書が証言していますが、これは神学上すこぶる重要な事実です。それは、マリアの御子が本来神であることの特別なしるしとなるものだからです。「人間の介入なし」に生まれたイエズスには、この地上における父親はいません。この事実は、イエズスが神の御子であり、また人間としての本性を備えていても、その御父は神のみであることを明らかに示すものです。

8 イエズス懐胎に聖霊の御力があったことは、超自然の性格を備えた新しい「霊的誕生」という人類史の始まりです。(コリント①15・45～49参照) このようにして三位一体の神は聖霊を通して被造物に働きかけてくださいます。詩篇作者の言葉がこの秘義を称えています。「あなたが息を送れば、彼らはつくられ、地の面は新たにされる。」(詩篇103(104)・30) 聖霊の御力によるイエズスの御宿りは、神が御自分を被造物にお示しになるという計画の、最も中心・頂点となる事柄です。それは「新たな創造」の始まりです。このように神は人間を超自然の目的に向けるため、また全てのものをキリストのうちにその目的に向けるために、決定的なかたちで歴史に介入なさるのです。ここに、人間に救いをもたらす神愛がはっきりと表われています。

9 救いの計画が成就されるとき、そこにはいつも被造物が関与しています。聖霊の御力によるイエズスの御宿りにおいてマリアは決定的な仕方で関与なさいました。御母として召し出され、しかも処女のままでいるという天使の御告げを受けて、マリアは心の内でそれを理解し、自らの意志を表わし、「いと高き者の力」のいやしい道具となることを承諾しました。これは人間にとってとても理解し難いことですが、聖霊は母性と処女性がマリアにおいて同時に存在するように働きかけられました。神の全能と愛のなせるわざであります。イザヤの預言「処女がみごもって子を生む」(7・14参照、マテオ1・22～23) がマリアにおいて実現したのです。旧約聖書はマリアの処女性を、貧しさと神の計画によろこんで協力する心のしるしとして記していますが、この処女性こそ、マリアを救い主の母に選ばれた神が至高のわざをなさる場となったのです。

マリアの特質は、マテオとルカが記す家系にも見られます。ユダヤ人の習慣に則って、マテオの福音はイエズスの系図から始まり (マテオ1・2～17)、男性方の家系がアブラハムからつらねられています。マテオはヨセフが法律上の父であることを通して、アブラハムとダビドからイエズスへとたどれば、結局は、救い主へと合法的につながることを明らかにしたかったのです。しかしながら、系図の終わりにはこう記されています。「ヤコブはマリアの夫ヨセフを生み、このマリアからキリストと呼ばれるイエズスが生まれた。」(マテオ1・16) マリアの母性をこのように記すことで、この福音史家は処女懐胎の事実、つまりイエズスには人として人間の父はいないことを暗黙のうちに強調しているようです。

一方、ルカの福音が記す系図(ルカ3・23～28)は、イエズスからさかのぼりアダムへと至ります。福音史家はイエズスと全人類の結びつきを示したかったのです。神が永遠の御独り子に人性をお与えになるとき、その協力者となったマリアはイエズスと全人類をつなぐ絆となったのです。

1 命と聖徳との泉なるイエズスの聖心(みこころ)！

泉！

イエズスがシカルと呼ばれるサマリアの小さな村に近づかれた時のことを思い出しましょう。そこには太祖ヤコブの時代に掘られた井戸がありました。

そこで主は井戸に水を汲みに来たサマリアの女にお会いになり、仰せられます。「水を飲ませてください。」「あなたはユダヤ人なのに、サマリアの女の私に飲ませてくれというのですか」と女は答えます。

そこで、「あなたが神の恵みを知っていて〈飲ませてください〉と言っている人がだれかを知ったら自分のほうからそうさせてくださいと頼んだにちがいない。そしてあなたは生きる水を受けたことだろう」と主は言われました。

さらに、「私の与える水はその人の中で永遠の命にわき出る水の泉となる」(ヨハネ4・5～14参照) と仰せになったのです。

泉！　生命と聖性の泉！

2 他の機会、エルサレムでの幕屋祭の最後の日のこと、福音史家聖ヨハネも書いているように、主は、「大声で『渇く者があれば私のもとに来て飲むがよい。私を信じる者は、聖霊のことばにあるとおり、生きる水の川がその内から流れ出るだろう』と言われた。」「イエズスは自分を信じる人々が受けるであろう霊について言われた」と福音史家はつけ加えています。(ヨハネ7・37～39)

3 私たちは皆、この生ける水に近づきたいと望んでいます。皆が生命と聖性の泉である神の聖心から飲みたいと望んでいます。

主において私たちに聖霊が与えられましたが、礼拝と愛によってその聖心に近づく全ての人に絶えず与え続けてくださっています。

泉に近づくとは源に至るという意味です。この創造された世界において、これほど私たちに愛をそそいでくださる聖心以外に、私たちの聖性が湧き出る所はありえません。

〈生ける水の川〉、多くの心から湧き出ました。今もそれは続いています。各時代の聖人たちがその証拠です。

4 キリストの御母よ、御身にお願いします。私たちのために御子の聖心への案内者となってください。私たちが主に近づき、命と聖性の泉なる主の聖心との親しさに生きることのできるようお教えください。

不変の教え

罪の贖いなるイエズスの聖心

1 私たちの罪のあがないなるイエズスの聖心。イエズスの聖心は命の源です。聖心によって死がうち負かされたからです。聖心は聖性の源です。聖心によって人間の心にある聖性の敵、つまり罪が打ち負かされたからです。

復活の日、イエズスは錠をかけて閉めてあった高間に入り、仰せられました。「聖霊を受けなさい。あなたたちが罪をゆるす人には、その罪は赦されるだろう」(ヨハネ20・23)と。

そして、十字架で釘づけられた跡のある御手と御脇をお見せになりました。百夫長の槍で貫かれた聖心をお見せになったのです。

2 このようにして、弟子たちは世界中の罪のあがないである聖心のもとに呼び戻されました。彼らと共に私たちも呼び戻されています。

罪を赦す権能、すなわち人間の心に住む悪に打ち勝つ権能は贖い主キリストの死去と受難のうちにあります。聖心は、この贖いの権能を示す特別の印なのです。主は御体全体で受難と死を受けられました。御受難と御死去は、そのときに受けた傷すべてを通して実現しましたが、聖心においてこそ受難と死を受けられたと言えます。聖心こそ、御体が死に至る苦しみを経験されたから、また、傷すべての苦しみによって力を消耗したのは聖心であったから。

3 このような自己放棄の中で聖心は愛に燃えていました。愛熱の炎が十字架上のイエズスの聖心を焼き尽くしたのです。

聖心のこの愛は私たちの罪を贖う力となりました。聖心の愛は神とその聖性に反する罪のうちにあるすべての悪、すべての神からの離反、人間の自由意志のすべての反抗、被造物の自由のすべての悪用に打ち勝ったのであり、勝ち続けます。

イエズスの聖心を消耗し尽くした愛、聖心に死をもたらした愛は、無敵の愛、打ち負かされざる愛です。神の聖心の愛によって死は罪に打ち勝ち、生命は聖性の泉となったのです。

4 キリスト御自身、聖心にある救いの秘義を知り尽くしておられます。キリストこそ、その証人なのです。罪の赦しのために聖霊を受けなさいと弟子たちに仰せられた時、世界中の罪のあがないであるあの聖心について証言されたのです。

聖マリア、罪人のよりどころ、御子の聖心に我らを近づけたまえ。

(一九八六・八・十七)

神の御子の人としての聖心

1 私たちは皆、イエズスの聖心の満ちあふれるところから恩寵を受けた。

御告げの祈りを唱えるために集う私たちは、御告げを受けたときのマリアに心を合わせます。この時みことばは人となり、御母の御心のもとに宿られました。

そこで、懐胎のときから神の御子の人としての心を一番よく御存じでいらっしゃる、御母の御心に一致するのです。「私たちはその満ちあふれるところから、恩寵に次ぐ恩寵を受けた。」(ヨハネ1・16)　このように福音史家は記しています。

2 聖心の充満とはどういうことでしょうか。どんなときに心が満ちあふれていると言えるのでしょうか。イエズスの聖心には何が満ちあふれているのでしょう。

それは、愛です。(…)

聖心は御父への愛で一杯です。神として、また同時に人としての充満。事実、イエズスの聖心は真に子なる神の人間としての心です。それゆえ子としての愛で一杯なのです。主がこの地上でなさり、おおせられたことすべて、この子としての愛の証明そのものです。

3 同時に、イエズスの聖心の、子としての愛は、御父の愛を示し、今も絶えず世界に示し続けています。実際、御父は「世を救うために御独り子を与えるほど、世を愛された」(ヨハネ3・16)のです。人の救いのために、人が「滅び」ではなく、永遠の生命を得るために。(同右)

ですから、イエズスの聖心は人に対する愛で満ちあふれています。被造物への愛で一杯です。世への愛で一杯、完全に一杯なのです。

この充満は決して尽きはしません。

ところで、地上の土や水、大気を消費すると、これらの資源は減少し、少しずつなくなってしまいます。

それゆえ、今日行なわれているような資源の過度な開発利用が、よく世間の話題に上るわけです。その結果、〈度を越した開発利用をしない〉という警告が出されます。

けれども、愛にはこのようなことは起こりません。イエズスの聖心の充満に起こることは、これと全く正反対のことなのです。

それは決して尽きることはなく、将来も絶対に尽きることはありません。

この充満から、私たちは皆、恩寵につぐ恩寵を受けるのです。

ただ、私たちの心の尺度を広げ、この豊かな愛から(恩寵を)抽きだすための心構えのみが必要となります。

そのために、私たちは聖母の御心と一致するのです。　(七・十三)

恵み豊かなイエズスの聖心

1 「すべて依り頼む者に対して恵み豊かなるイエズスの聖心！(イエズスの聖心の連禱より)」キリストの御母よ、きょう私たちは、御告げの祈りを唱えるために集い、ガリラヤのカナで起きた出来事に思いをめぐらします。

それは、救い主の公生活の始まりのこと。イエズスは御身と最初の弟子たちと共に婚宴に招かれました。そしてぶどう酒がなくなった時、聖母マリアよ、御身はイエズスに仰せられたのです。「あの人たちはぶどう酒がありません」(ヨハネ2・3)と。

御身は主の聖心をご存じでした。主の聖心が依り頼む者に対して恵み豊か(寛大)であることをご存じでした。

御身はガリラヤのカナにおける祈りによって、イエズスの聖心の寛大さが現われるようになさったのです。

2 聖心は寛大であり、現に充満した状態でした。真の人であるキリストは神性で充ち満ちていましたから。そして神は愛なのです。

聖心はお愛しになるゆえ寛大です。愛するとは与えることを意味します。愛するとは自らを与えること、人々のため、皆のため、一人ひとりのために、全てを与えるということです。

聖心は、主を呼び求める一人ひとりのもの、たびたび無言のうちに主に呼びかける人々のものです。ありのままの真理を全てあらわして主を呼び求める。そして、この真理は愛をひきつける。

真理には愛を招く力があります。「心の貧しい人」、「正義に飢え渇く人」、「憐れみのある人」たちは皆、真理によって愛をひきつける力を持っている。

このような人々は皆、そして他の大勢の人々も、愛に対して強い力を持っています。この人々のおかげで愛が伝わり、愛が与えられ、こうして心の寛大さが示されるのです。

それらの人々のうち第一番目に来る御方、それは聖マリアよ、御身です。

3 すべて依り頼む者に対して寛大なるイエズスの聖心！　どれほど寛大になっても愛が尽きることはない！　かえって成長する。絶えず深くなるのです。これこそ愛の不思議。これこそ、すべての人に対して寛大なイエズスの聖心の秘義。

皆に、そして一人ひとりに開かれる聖心。私のために、一杯に開かれている聖心。その上、この寛大さが尽きることはありません。聖心の寛大さを見ると、愛は死の法にではなく、復活と生命の法に従っていることがわかります。愛は愛とともに成長することを証明していますから。これこそ愛の本質です。

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部七十円送料四十円
■一年予約八〇〇円送料五〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要
郵便振替　神戸　3-72393